『教行信証』行巻の行―称名破満釈を中心に―

玉木興慈

一

親鸞は、その晩年に多くの著作を記すが、『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』と略す）こそ、親鸞思想が最も組織的・体系的に明かされた書であるということができる。『教行信証』の草稿・執筆は、親鸞の関東在世当時に始まり、九十年の生涯を閉じるその最晩年まで推敲を重ねられたことは周知の如くである。まさに畢生の書とも言うべき『教行信証』の執筆の動機・理由については、これまでも種々取り上げられている。[1] その一つは、弥陀の本願の真実に出遇えた喜びと知恩報徳の思いから執筆したとするものである。釈迦弥陀二尊に対する仏恩だけではなく、師恩に報いることも親鸞を『教行信証』執筆に駆り立てたと考えられる。『教行信証』後序の「深く如来の矜哀を知りて」「まことに師教の恩厚を仰ぐ」「仏恩の深きことを念うて」[2]という文言はそれを表すものであろう。また『教行信証』の執筆動機として、選択本願念仏の真実を明らかにし、誤った非難・批判・誤解を正していくということも挙げられる。後序の「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛んなり。しかるに諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷ひて邪正の道路を弁ふることなし」[3]などの文言は、元久・承元・嘉禄の法難など、仏教以外の立場や聖道門の立場のみならず、浄土門内にも、法然の語る教えを

その如く受けとめることができない者があったことをうかがわせる文言である。

このように、法然によって語られた本願念仏の教えに出遇い得た喜びと共に、その教えの真実が説かれる『選択本願念仏集』の真実性を明らかにせんとする思いによって、『教行信証』執筆がなったということができる。法然が『選択本願念仏集』の末尾に秘伝の書とも受け取れる表現を残すのに対して、『教行信証』末尾には「もしこの書を見聞せんもの、信順を因とし、疑謗を縁として、信楽を願力に彰し、妙果を安養に顕さん」と記され[4]、他の目に触れることを想定して、執筆されたことがうかがえる。

本論は、『教行信証』六巻の標願・標挙・細註に注目し、そこから「行巻」の特徴をうかがうことを第一の課題とする。さらに、従来の「行巻」理解を、主として江戸時代の講録を見ることによって示しつつ、「行巻」称名破満釈と「信巻」所引の『往生論註』引文の比較を通して、第一の課題を検証することを第二の課題とする。

二

『教行信証』は真実五巻と方便一巻の六巻からなる。六巻それぞれに標願・標挙が掲げられ、標願・標挙・細註によって、その巻の内容を端的に知ることができる。まず「教巻」には次のように示される[5]。

大無量寿経　真実の教　浄土真宗
真実の教を顕す　一
真実の行を顕す　二
真実の信を顕す　三
真実の証を顕す　四
真仏土を顕す　五

同様に、「行巻」以下「化身土巻」までの標願・細註を列示したものが以下である。

・行巻(6)

諸仏称名の願　浄土真実の行　選択本願の行

・信巻(7)

至心信楽之願　正定聚之機

・証巻(8)

必至滅度の願　難思議往生

・真仏土巻(9)

光明無量の願　寿命無量の願

・化身土巻(10)

無量寿仏観経之意

至心発願之願　邪定聚機　双樹林下往生

阿弥陀経之意

至心回向之願　不定聚機　難思往生

これらを一瞥すると、真実五巻と方便一巻において、巻の名称からすれば、方便の「化身土巻」は「真仏土巻」とのみ対応するかの如くである。「真仏土巻」の末尾は、

それ報を案ずれば、如来の願海によりて果成の土を酬報せり。ゆゑに報といふなり。しかるに願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。選択本願の正因によりて、真仏土を成就せり。真

仏といふは、『大経』には「無辺光仏・無碍光仏」とのたまへり、また「諸仏中の王なり、光明中の極尊なり」とのたまへり。『論』には「帰命尽十方無碍光如来」といへり。真土といふは、『大経』には「無量光明土」とのたまへり、あるいは「諸智土」とのたまへり。『論』には「究竟して虚空のごとし、広大にして辺際なし」といふなり。往生といふは、『大経』には「皆受自然虚無之身無極之体」とのたまへり。『論』には「如来浄華衆正覚華化生」といへり。また「同一念仏無別道故」といへり。また「難思議往生」といへるこれなり。仮の仏土とは、下にありて知るべし。すでにもつて真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆゑに知んぬ、報仏土なりといふことを。まことに仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身・化土と名づく。真仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す。これによりて、いま真仏・真土を顕す。これすなはち真宗の正意なり。経家・論家の正説、浄土宗師の解義、仰いで敬信すべし。ことに奉持すべきなり。知るべしとなり（傍点は引用者）。

という文言で閉じられ[11]、「化身土巻」冒頭が、

つつしんで化身土を顕さば、仏は『無量寿仏観経』の説のごとし、真身観の仏これなり。土は『観経』の浄土これなり。また『菩薩処胎経』等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また『大無量寿経』の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。

と始められる如きは、まさに、「真仏土巻」と「化身土巻」との直接的な対応を示すものである。すなわち、「真仏土巻」の末尾は、上来、真実の仏・真実の浄土について明かしてきたが、仮の仏・浄土については、以下の「化身土巻」で、方便化身・方便化土と示されると明言する。このように、巻の名称に注目すれば、「化身土巻」は「真仏土巻」と対応することは明白である。しかし、「化身土巻」は「真仏土巻」のみではなく、「信巻」或いは「教巻」「証巻」とも対応しているということができる[12]。先に挙げた各巻の標願・標挙はそれを如実に物語る。

すなわち、「化身土巻」に「無量寿仏観経之意」「阿弥陀経之意」と記される点に注目すれば、「教巻」の「大無量寿経」と対応することがわかる。[13] 親鸞の三部経観の特徴をここにうかがうことができる。法然は『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』の浄土三部経について、それぞれ独立した経典であるから、それぞれに特色を認めているが、その間に何らの差別や、価値の軽重を認めず、まして真仮を見ることはなかったが、親鸞は、『観無量寿経』『阿弥陀経』に隠顕の両義を見るのである。「化身土巻」にいわゆる三経隠顕釈を設け、顕の義からすれば、『観無量寿経』『阿弥陀経』は化と見なさねばならないが、隠の義からすれば、『観無量寿経』『阿弥陀経』にも真実が示されるという。しかし、『教行信証』の真実五巻に、『観無量寿経』『阿弥陀経』の引文が一切されない点よりすれば、『大経』が真実の経典であるのに対し、『観無量寿経』『阿弥陀経』は化なる経典との位置づけと見なすことができる。[14] つまり、経典について、「教巻」と「化身土巻」との対応を見ることができるのである。

次に、至心発願之願・至心回向之願に対応する語は至心信楽之願であり、この点において、「化身土巻」と「信巻」の呼応を見ることができる。これらは、古来、生因三願と並び称されてきたように、衆生の浄土往生の因が誓われた願であり、親鸞に於いては、三願転入の宗教経験に配当される。

また、機については、「化身土巻」に「邪定聚機」「不定聚機」と挙げられるのに対して、「正定聚之機」は「信巻」に挙げられる。邪定聚・不定聚・正定聚とは、それぞれ「よこさまに定まった仲間」「定まっていない仲間」「正しく定まった仲間」という意である。正定聚については、『一念多念文意』の「正定聚の位」「正定の聚」の左訓に、[15] それぞれ、「おうじょうすべきみとさだまるなり」「かならずほとけになるべきみとなれるとなり」と語註されるように、往生・成仏することが正しく定まっているということである。これよりすれば、邪定聚・不定聚とは、往生・成仏が誤って定まっている者、或いは、往生・成仏が未だ定まっていない者という意になる。誤って定まっているとは、往生・成仏がかなわない者と解することもできる。『一念多念文意』の「邪聚」の左訓に「じりきざ

ふぎやうざふしゆのひとなり」と施され、また「不定聚」には「じりきのねむぶちしやなり」と左訓されるが如きである。

更に、往生については、「化身土巻」では双樹林下往生・難思往生が挙がるが、「証巻」に難思議往生と挙げられている。「化身土巻」の双樹林下往生・難思往生とは、細註に第十九願・第二十願が挙げられるように、第十九願・第二十願によって往生を遂げようとすることである。具体的には、「真仏土巻」の末尾の「仮の仏土の業因千差」の言葉が示す点である。第十九願による往生とは、『観無量寿経』に示される定散二善、つまり息慮凝心・廃悪修善によって往生を遂げようとすることであり[16]、第二十願とは、念仏一行を選び、己れの善根功徳として廻向することによって、往生を願うことである[17]。第十九願・第二十願は行こそ異なるが、その両者に共通する心は信罪福心と見ることができる[18]。信罪福心とは、信罪心・信福心である。信罪心とは、自らの罪業によって、往生がかなわないと思う心であり、信福心とは逆に、自らの修する善行によって往生がかなうと考える心である。ともに、自業自得の因果を信じる心であり、この点において、弥陀の本願を疑う心ということになる。「信巻」に[19]、

もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと、知るべし。

と記され、「証巻」の往相廻向釈の末尾に[20]、

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。知るべしとなり。

と記される如く、自身の往生成仏の因も果もすべて、弥陀回向によると知ることが、弥陀の本願を知ることであり、自業自得の因果を信じることは、弥陀の本願を疑う心にほかならない。

このように見てくると、『教行信証』六巻の内、「化身土巻」は、その巻名からすれば、「真仏土巻」とのみ対応するが、その標願・標挙・細註に注目すれば、他の巻との明確な呼応関係を知ることができる。しかし、唯一、「行巻」とのみ対応がない点に注意せねばならない。

経については、『仏説無量寿経』を真実の経典と見、『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』を顕義においては方便の経典と見る点に於いて、「化身土巻」は「教巻」と対応している。また生因三願のうち、第十八願を真実と見、第十九願・第二十願を方便の願と見る点については、「化身土巻」と「信巻」との対応を知ることができる。「化身土巻」と「信巻」については、「邪定聚の機」「不定聚の機」と「正定聚の機」との対応も重なっている。また、往生について、「双樹林下往生」「難思往生」と示される「化身土巻」に対して、「証巻」では「難思議往生」となっている。このように、真実五巻の内、「行巻」以外の四つの巻は「化身土巻」との対応があるが、「行巻」にはそれが見られない。つまり、「行巻」に明かされる行・大行については、真実と方便があるわけではないということである。『教行信証』においては、真実の行・方便の行があるわけではなく、大行と呼ばれる行はそもそも真実であると言うことを意味している。

しかし、従来、「行巻」に明かされる行・大行を解説する際に、しばしば、信心の有無と絡めて、信心を具した行は真実・如実の行であるが、信心を具さない行は不如実の行であるとの解釈がなされる。一、二の例を挙げると、まず大江淳誠『教行信証体系』（永田文昌堂、一九五〇年、二八〜三〇頁）には、次のようにある。

> 稱無碍光如来名とは、論註の讃嘆門の釋より承くるのであって衆生の稱名である、爾らば衆生の稱名をもって大行の體とするかといふにそうでない、やはり法體名號を體とするの義である。不如實の釋名に簡んで、如實の稱名を大行となすと顯はすのである。然るに如實の稱名を以て大行と名くとするも、衆生の稱する所に、大行の名を與ふるとするのではない。衆生の稱名をもって出體しつつもその指すところは法體の名號である。然

らば何故に直ちに法體を以て示さず、特に衆生の稱名をもって語るやといふに、これがさきの標願細註の意と照應し、名號は固然たらず、常に法界に響流し、如實行者の口頭に露はれて稱名となりつつありと示すのである。

また、本願寺派の僧侶全般を対象として、浄土真宗の基本的な要義をまとめた、勧学寮監修の『真宗の教義と安心』（本願寺出版社、一九九四年、四一頁）には、

衆生の往生成仏を決定する力・はたらきは名号であり、その名号が衆生に至り届いたところを信心といい、衆生の口のうえに声となって出たところを称名というのである。

とある。これらの解釈の最たる根拠として、曇鸞『論註』下巻讃嘆門釈の名号破満の文言が引かれるのである。「行巻」大行釈において、御自釈に続いて『大経』の諸文が引かれた後、いわゆる称名破満釈があるが、その出拠として曇鸞『論註』を指摘することができるからである。

三

本章では、「行巻」称名破満釈について、いわゆる講録に示される理解を一瞥したい。講録による表現の重複についても、煩を厭わず、以下に抄述する。

1．智暹（一七〇二～一七六八）『教行信証樹心録巻二』[21]

『論註』に云く、……無信孤行は往生の正業に非ず。故に結して「正念也」と云う。まさに信行不離と、知るべきなり。

2．僧鎔（一七二三～一七八三）『本典一滴録』[22]

『論註』に云く、彼無碍光如来名号、能破衆生一切無明、能満衆生一切志願と。かの文によりたまふ。しかし、

かれは所行について破惑満願を明かしたまふ。『和讃』に、無碍光如来の名号とかの光明智相とは等と、これも所行のうへでのたまふ。今文は行者の能行のうへについて、破惑満願を明かしたまふ。故に「称名能破」等とあり。……「南無阿弥陀仏即是正念」とは、大行・大信相即す。畢竟じてこのところ、信行不離の義を結釈したまふなり。……「可知」とは、この信行不離のすがたをしるべしとなり

3. 玄智（一七三四～一七九四）『顕浄土真実教行証文類光融録巻五』[23]

破闇満願の文は『論註』の文を用う。「信巻」本に全文を引くがごとし。彼には名号と言い、今は称名と作す。

4. 柔遠（一七四二～一七九八）『顕浄土真実行文類頂戴録二』[24]

『論註』に云く、……功徳の名号、衆生の心底に融入するが故に、聞名の一念よりまたよく功徳の名号を流出す。故に今は上の「聞我名」の文を承け来りて衆生の能行を明かす。……「称名」等とは、上は『註論』に依りて「称無碍光如来名」と云ふ。今もまた、その文に応じて、同讃嘆門の釈に依りて、もって浄土真実の行を顕す。故に「称名」等と云ふ。しかるに『註論』のごときは、破闇満願をもって所行の徳と為すに、今は能行に属するは、所行の徳を全うじて能行の徳と為ることを顕さんがための故に、信相に寄せて一念の具徳を顕さんがための故に、信行不二の義を顕さんがための故に、方便真門及び諸仏念仏に簡ばんがための故なり。……一形相続の報恩の称名は、所行海を出でず、大心海を出でざる

5. 深励（一七四九～一八一七）『広文類会読記巻三』[25]

文をうくる処を取り違へぬやうにすべし。……大行者称無礙光如来名とあるあの文を承けてきたものなり。これは論註下無礙光如来名号能破衆生一切無明能満衆生一切志願これに拠り給ふなり。……論註には無碍光如来名号と云ふ。今ここに称名との給ふは上の称無礙光如来名をうける也。時に称名の破闇満願のあることの拠は安楽集上若人但称念弥陀名号能除十方衆生無明黒闇等の文なり。全体がこの論註の釈からが所釈の浄土論

で見れば讃嘆門釈の称彼如来名の下の釈なり。讃嘆は称名なり。称名しても疑ひながらとなへるは不如実修行。深く信じてとなへる称名は如実修行相応にして破闇満願の徳あるなり。……転釈する所の真実行は信心に離れた行にはあらず

6. 興隆（一七五九～一八四二）『顕浄土真実教行証文類徴決巻三』[26]

この文註下無礙光如来名号能破衆生一切無明能満衆生一切志願に依る。註は所行に約し、今は能行に約す。……名号法体、本破満の徳を具す。自力称念の人、信心を得ず。以て己の善根とするが故に不如実の行を成し、破満の徳を得ず。他力称名の人、至心信楽己を忘れ法の全体を契す。故に如実修行を成じ、破満の徳を具す。

7. 石泉（一七六二～一八二六）『教行信証文類随聞記巻四』[27]

上来五経の文を引くは、十七願は諸仏の大人が弥陀の名号を称讃して、衆生の聞信を発生するなり。信心の体になる物を、弥陀より諸仏へ渡し弘めさするなり。正定聚の機ありてそれを如実に聴聞すれば、すなわち信心なり。その信を発生するために、諸仏の説法あり。これ十七願、当たり前にして、その十七願へ寄せて衆生の大行が、大信を摂めることを顕すなり。諸仏の仕向けに依りて衆生の大信を生じ、それより大行が出る。その大行は大信を内に持っている。諸仏の称名に衆生の聞信を持つ風情、衆生の大行やはり大信を持つなり。その衆生の上の分野を諸仏によせて顕すが上来引文の意、そこで爾者と云う。……称名能破等……これは論註の讃歎門の釈より取り来るなり。時に破満はよろし。上の称名は註と違う。かれは無碍光如来名号とあり、この名号は言の上は所行なり。いま称名とあるは能行なり。この和会が出来ぬゆえ、已前の説には、この称名は諸仏称名という説もあるよし。右のごとく云うて前に引く文の内、十七願当分はよろし。重誓偈の聞、往覲偈の聞）、呉訳の蜎飛蠕動の歓喜等をここへ承けられぬ。かつ標挙の下の選択本願之行が片付かぬことになるな

り。論註の名号、かれは所行。ここの称名は、能行は知れたことながら、能所の違い、あい背かず。なんとなればここの称名は所行を全うするの能行なり。能行が所行を動かさぬ。南無阿弥陀仏の法体を法体のままに受け取る。在り場はかわれども、物体は一つなり。将軍宝庫内の金も、賤者の持つ金も、金にかわりはなし。二十願では違うなり。小判にみずからの細工をするなり。弘願の称名は、名号の所行にある破満の益をそのまま出すなり。所行、能行、しばらく在り場にかわりあれども、物体は少しも違わぬなり。そこを知らせて称名と云う。

8. 芳英（一七六四～一八二八）『教行信証集成記巻六』[28]

先に「大行者称無碍光如来名」と言ふ、これその行相なり。すべて讃嘆門の註に依る。……「称名憶念無明由在」に簡異す。けだし、この言は『註』に依る。しかるに、当巻にこれを引かず、「信巻」に全文を引くは、他力の行信不離なるの謂いなり。『註』に「名号能破」と曰ひ、いまは「称名能破」と言ふ。もって知る。……自力称名の人においては、破満の大利あることなし。自己傲挙の故に痴闇あり。往生不定の故に満願なし。故に知んぬ。この称名は、真実信心の称名なり。ただの口称ならず。学者よろしく思択すべし。

9. 善譲（一八〇六～一八六六）『顕浄土教行証文類敬信記巻三』[29]

この称名破満の文は、『論註』に依れるなり。上に行体を指定するにも、『論註』に由って、称無礙光如来名等とのたもう。今またその文に応じて、同じく讃嘆門の釈に依って、もって浄土真実の行を顕す。故に「称名」等と云ふ。しかるに『論註』にては、破満をもって、所行法体に繋げてあり、今は能行に属して、称名破満とあるは、いかなる意なりやと云うに、古徳の説に依って、この意を窺えば、……この称名を、諸仏の称名とする人あり。あるいは衆生の称名とみる人あり。諸仏称名とみる義にて云へば、称名の言は生仏に通ずれども、今の文勢にては、その義、諸仏を主とす。所被の衆生をもって所破とし、所満とせるゆへ、自他相望の破満に

して、十七の称名が、他の衆生の無明を破す等と云ふ相なり。故に当巻に、諸仏称名の願と前に標して、衆生の称名まで取り込んで明かせども、衆生の称名即諸仏の称名等と云ひて、今の称名破満は、これを聞く人に望むれば、すなわち名号破満なり、と解する義あり。または衆生往生の真実行を明かす。「行巻」細註の二句が、この所明なり。しかれば十七の位にて明かせども、なおこれ衆生の能行ならざるべからず。依りてこれは諸仏称名と、徳を同する衆生の称名にて、他の衆生の所聞となりて、破満する時なきにはあらざれども、正しくは称名する人の、自身の破満の利益を明かして、みずからの浄土真実行を成ぜるものなり、とみる人あり。

いま私には、衆生信後の称名、諸仏讃嘆と徳を同じて、自から常行大悲の益もありて、他の所聞となり、他をして破満せしむ。その辺より云えば、全じて諸仏称名と云ふ位なきにしも有らざれども、今はまさしく衆生みずからの称名行に依りて、おのずから破満の利益を蒙り居る相なり。引文と云ひ、御自釈と云ひ、前に付けば、細註の二句と云ひ、処々の文をみるに、衆生の能行に居して、その人の利益を明かすとみるべきなり。……名号はと云はず、「称名は」と呼出したるはいかんと云ふに、ただ「名号は」と云ひては、未だ衆生の手に入らざる、所聞所信の諸仏の手許にある十七のこととともなる。故にいま「称名は」と呼出したるは、衆生の機の方だに領受したる法体を呼んがために、機に亘りし称名に就いて、「称名は」とのたまふ。依りて、「称名は」とのたまへども、正業と押えるところは、やはり名号にて押へて、名号業因と云ふ思し召しなり。……「正念」の言は、相承に三義あり。『二巻抄』下は、信行に通じて取りたまひ、『略書』は大行とし、『末灯鈔』は信心とせり。かくのごとき二河譬の正念の言、三義に通ずる中、今のところは信行いずれかと云ふに、このところはまさしく信なり。能行を法体に会し込んで、またそれを能行の正念に出すべき理なし。依りて知る。この正念は明教・快楽・石泉等も信心と取る。しかるべきなり。……南無阿弥陀仏直ちに行者の信心となることを詳にしたまひて、南無阿弥陀仏則是正念とのたまふ。

10. 円月（一八一八～一九〇二）『本典仰信録巻一』[30]

上の諸仏所讃の名を承けて、称名破満の義を顕す。称名はすなわちこれ諸仏所讃の名義なるは論を待たざるところなり。故に直ちに十七願を引き、名号をもって称名と為す。……「称名」等とは、『論註』に云く、……称名破満はすなわちこれ名号破満なり。……能破の称名はすなわち大信を具す。大信はこれ疑惑の反なるが故に、よろしく能破に属すべし。具信の称名はよく破満の徳あり。

11. 足利義山（一八二四～一九一〇）『教行信証摘解巻二』[31]

『論註』は名号に就いてこれを談ず。いま「称名」と云ふは……破闇満願は断疑生信の謂なるが故に、名号もとよりその用あり。しかるにいま能称の上においてこれを談ずれば、まさに称名の全体これ疑ふべからず信ぜざるべからざるの法たることを知るべし。しかるに不如実の行は、その徳号を称すといへども、断疑生信すること能はずして、己の称功と憑むは、なおし燭を秉りて闇を憂ふるがごとし。この義を示さんがために、能行の上に就いて破満を説き、もって称名はただこれ願力を仰ぐの相にして行即信なることを了せしむ。

少々、資料提示が冗長になったが、これらを整理すると、細かい相違はあるにせよ、以下の特徴を抽出することができる。その第一として、称名破満釈は、『論註』の文言によったものとの指摘である。先に見た十一の講録全てに於いて指摘される点である。また、玄智・芳英は、「信巻」に全文が引かれる点にも言及している。第二に、所行・能行という表現も含めて、『論註』では「名号」破満と示されるにも関わらず、「行巻」では「称名」破満として釈される点についての言及である。この指摘の着眼は正鵠を得たものであるが、その内容には首肯することはできない。上に挙げた講録の指摘内容を概括すると、智暹の言葉を借りるならば、「無信弧行は正業に非ず……信行不離」に尽きると思われる。僧鎔は「大行・大信相即す」「信行不離」、柔遠は「信行不二の義」「報恩の称

名」、深励は「真実行は信心に離れた行にあらず」、石泉は「大行が大信を摂める」「大行は大信を内に持っている」、芳英は「称号は、真実信心の称名なり。ただの口称ならず」、円月は「能破の称名はすなわち大信を具す」「具信の称名はよく破満の徳あり」、そして足利義山が「能行の上に就いて破満を説き、もって称名はただこれ願力を仰ぐの相にして行即信なる」と示すは、まさに、信心を具した称名であってこそ名号の徳を備えると明かすものであり、逆に、信心を具さない称名は名号の徳を備えないために、闇を破り願を満たすことはないという主張となっている。

四

本章では、「信巻」大信釈所引の『論註』について、講録に示される理解を一瞥したい。先に倣って、煩を厭わず、以下に抄述する。

1．僧鎔『本典一滴録』[32]

称彼如来名等とは『論』の文なり、『註』に「称彼如来名者、謂称無礙光如来名」と、『行巻』の初に「大行者称無碍光如来名」とは正しくこの『論註』をとり給ふ、然るに『論註』に、称彼仏名号也とあるべきに、いかなれば無碍光如来との給ふぞと云ふに、称彼仏名号とあれば名義相応不相応のいはれがしれず、ゆゑに名義具足して如実修行相応の称名なることをあらわさんがために称無礙光如来名とのたまふ、下文に「然有称名憶念而無明由在而不満所願者」と、称名すれども名義不相応不如実の人は破闇の徳かくる、破闇の徳かくれば無碍光の実義を失するなり。

2．玄智『顕浄土真実教行証文類光融録巻十五』[33]

問。此の文、初に称名を明かす。故に行巻引く所なり。今、まさにただ、後の三心の文を引くべし。何ぞ前文

を引くや。これ同文の故に来たらんとするか。

答。然らず。今、行信に摂す。謂く称名如実修行は他無く、ただ是れ信心の故に。

3．柔遠『顕浄土真実行文類頂戴録三本』[34]

称彼如来名の下は上の乃至十念を承けて以て弘願の信相を顕す、その義解すべし。然有称名等とは第二に承上起下なり、云ふ所の称名等は即ち是れ真門の念仏、定散の念仏なり。……信心宗本は不相応なれば建立せざるなり。

4．深励『広文類会読記巻十』[35]

毎度出づる如く教行信証文類故に御引文の次第に思召のあることなり。御引文の様子が即ち御釈なり。……称無礙光如来名。是が行巻では甚だ大切な釈で行巻の最初に言大行者称無礙光如来名也と云ふ御言も是に御依りなされたものなり。其の義は上の行巻で具に弁じた通りなり。……下の論文は上の称彼如来名の念仏の称えやうを説かせられるのなり。……然有称名憶念。ここらも論註でよむときは称名憶念すれども無明なを在して所願をみたざるものありと点ずるなり。ここの祖師の御点はさうでない。称名憶念することと云ふ仮名を付けたまふ。

5．興隆『顕浄土真実教行証文類徴決巻九』[36]

行巻は註上今、長行の論文を引き、讃嘆門を明かす文を引く。彼は如実相応の修行を取り、大行を証す。今、修行の如実相応を取り、大信を証す。如実相応の信は、今註文の釈する所なり。……今此の称名は、不如実行に非ず、一心に無礙光如来に帰命するの称名を顕す。これ真実信心の称名なるが故に、行巻首に大行を標す。

6．石泉『教行信証文類随聞記巻二十』[37]

菩薩無量劫の諸波羅蜜が此の五念門に約めてある。法蔵菩薩永劫の所修この外は無し。其れを尽十方無礙光如

来とまるめて行者に渡す。其れを行者が受け取る。其の処で報土の真因は円満する。その行者の受け取ることを顕すが、讃嘆門の称名なり。……すでに定散の行相は改めても、能修の心相が定散心の意味が改らぬで、真実大行にならぬ。

7. 芳英『教行信証集成記巻二十四』[38]

引意は讃嘆門ならず、信心に在るが故に、行巻所引と同じからず。同じからずと雖も、行信信行不離。以て、他力真宗の正意なり、略して文相を釈す、行巻に記してこれを弁ずるが如し。

8. 善譲『顕浄土教行証文類敬信記巻九』[39]

信心為本を建立せずんばあるべからざることを知らせんがためなりとする義、好し。この意を行巻の中で見れば処々にこの趣きあり。……大行を定めては称無礙光如来名と無碍光の称名をことはれり。此の如く行巻に於て如実修行相応は信心一に定めたりの義意を往々示したるものを今この信巻に来たり、更にその意を詳にして信心宗本を顕すゆへ、この註の文を引て如実修行を信心にくくり上ることを知らせ給るなり。……破満の益を得ることは信一念にあり。ゆへに称無礙光如来名と云へば必ず真実信心にあらずば称すること能はず。真実信心の称名なることを顕はすゆへ称無礙光如来名との給ふ。これは大行の初に於ても弁じたることなり。……不満如願の称名を出す、是が即二十願の称名なり。……不如実の行者はこれを知らざるゆへ称名しても無明由在の不如実行に堕す。

9. 円月『本典仰信録巻三』[40]

衆生の称名を明すは、称名に簡んで信を要と為すことを顕さんと欲する。……真門の人の如きは、我が往生を仏体に成ずることを知らず、信罪福の心を以て本願力を求願す、故に機情自ら覆ひ、仏智を了すること能はず、仏名を称すと雖も法体に契はず、これを不如実と謂ふなり。……縦ひ名号を称するも、若し此の心なく

ば終日称名するも皆是不如実なり。ただ此の心を具すれば如実なることを得。

10．足利義山『教行信証摘解巻三』[41]

上の大行を提出して今の大信なくば不如実と為ることを顕し、大信は是れ行が為の必要なるを示すが故なり。……縦ひ、名号を称するも若しこの心なくば、終日の称名皆是れ不実なるが故に、如実不如実はただ此の心の有無に係る。

再び冗長な引用になったが、これらを整理して数点の特徴を抽出すると、第一に、行巻「称名破満釈」との関係が指摘されるということである。第二に、以下に示す親鸞の読替に言及していない点である。

「行巻」称名破満釈の文言は、恐らく『論註』の文言に影響を受けてのものであり、この点を否定するわけではない。[42]しかし、『論註』の文言に影響を受けているということと、『論註』の思想がそのまま踏襲されるということは、異なるといわねばならない。私が問いたいのは、『論註』の思想を称名破満釈に重ねることの是非である。かつて、すでに註として論じた点であるが、本論の主題に関わる点であり、以下に再述する。

曇鸞の『論註』に「彼無礙光如来名号能破衆生一切無明能満衆生一切志願然有称名憶念而無明由在而不満所願者[43]」とある。これを曇鸞は「かの無礙光如来の名号は、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。しかるに名を称し憶念すれども、無明なほありて所願を満てざるものあり[44]」と読むが、親鸞は「かの無碍光如来の名号は、よく衆生の一切の無明を破す、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。しかるに称名憶念することあれども、無明なほ存じて所願を満てざる[45]」と読み替えている。曇鸞の理解に従えば、「無礙光如来の名号が衆生の無明の闇を破し、志願を満足する。けれども、無礙光如来のみ名を称え憶念しても、無明が残り志願が満たされない者も中にはいる」ということになる。一方親鸞は、「無礙光如来のみ名を称え憶念しても、無明が残り志願

が満たされない」と読み替えるのである。曇鸞においては、機を二種類に分けて、無明の破られる者と無明の破られない者の存在が想定されるのに対し、親鸞は、あらゆる衆生の無明が残ると示し、機の上に種類を設けない。機の上に種類を設けるならば、必ず、自身を勝れた衆生と見なすという、親鸞の卓見を示す一例であろう。(49)

つまり、曇鸞『論註』においては、二不知三不信を示すことによって、無明が残る点を指摘し、二知三信の称名によって無明が晴れることを勧められると理解できる。僧鎔が「名義具足して如実修行相応の称名」と語り、興隆が「今此の称名は、不如実行に非ず、一心に無礙光如来に帰命するの称名を顕す。これ真実信心の称名なるが故に、行巻首に大行を標す」、石泉が「定散の行相は改めても、能修の心相が定散心の意味が改らぬで、真実大行にならぬ」、円月が「縦ひ名号を称するも、若し此の心なくば終日称名するも皆是不如実なり。ただ此の心を具すれば如実なることを得」、足利義山が「如実不如実はただ此の心の有無に係る」と記すが如き理解は、曇鸞『論註』による理解といわねばならない。

しかし、「信巻」の引文意図はそこにはない。二知三信を具した称名をせよというのでもなく、二知三信になれというのでもない。二知三信によって無明が晴れる可能性がないからである。むしろ親鸞は、二知三信にならないが故に、「無明が破れる可能性のない」ことを示さんとしたとうかがうべきである。

そして、玄智なども記すように、この二不知三不信に関する内容を「信巻」にのみ引用し、「行巻」称名破満釈には引文されない。にもかかわらず、なぜに、称名破満釈に、『論註』を重ねて読むのであろうか。二知三信の称名を明かし、勧めるのであれば、「行巻」に於いてこそ、『論註』を引文すべきであろう。「行巻」に引文されない親鸞の意図、つまり、親鸞の「行巻」理解は、決して、信心を具足した称名を意味するものではなく、称名が無明を晴らす、その称名の無碍性を明かすものである、と考えるべきである。ここにおいて、称名破満釈について、講録に問われた点が大きな意味を持つ。『論註』では名号破満であるが、「行巻」では称名破満である、その相違につ

いてである。しかし、決して、名号即称名を言わんとする意図ではない。そうではなく、南無阿弥陀仏は、称名に於いてこそ、その無碍性を発揮するというのである。名号が固然としたものであれば、衆生の煩悩を破ることはない。衆生の煩悩を破る働きは、名が称えられることに於いてでなければならない[47]。

「行巻」の標願には「諸仏称名の願」とあり、「大行とは無碍光如来の名を称するなり」と大行が端的に規定されるのである。諸仏の称名は言うまでもなく、自身の成仏のための称名ではなく、弥陀の功徳を讃嘆する称名である。釈尊の称名がその原点である。この釈迦諸仏による弥陀の仏徳讃嘆の称名が、十方に聞こえるということは、十方の衆生がこの称名を聞くということである。第十七願文に続いて引かれる重誓偈の「名声超十方　究竟靡所聞[48]」の意味する所である。つまり、未だ弥陀の本願の真実を聞き得ていない者に、弥陀の真実を聞かせる＝語ることが大行の本質であるということができる。

親鸞の求道を振り返ると、比叡での二十年にも及ぶ求道の中で、南無阿弥陀仏に当然、出会っていたはずである。にもかかわらず、その中では「生死いづべき道[49]」が解決せずに山を下りることになる。六角堂を経て、吉水の法然の元に「降るにも照るにも」通い、弥陀の本願の説法を聞く中で、本願と出遇うことになる。つまり、親鸞を獲信に導いたのは、法然の説法に他ならない。『歎異抄』に「よき人のおおせ」といわれる「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」の説法が、親鸞にとっての大行となるのである。つまり、法然の南無阿弥陀仏の称名が大行と言える。比叡での南無阿弥陀仏との出会いと、法然の説法による南無阿弥陀仏の出遇い、これは『教行信証』「総序」の「弘誓の強縁、多生にも値ひがたく[50]」や、『歎異抄』後序の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり[51]」が示す内容とも受け取ることができる。親鸞に弥陀の真実を信知せしめた称名、法然の称名を大行という。法然が南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を讃嘆する、その称名こそが、親鸞にとっての大行なのである。その法然の行に、親鸞に信心の有無を詮索するのはナンセンスといわねばならない。親鸞に信

心を獲得せしめるのが、法然の称名であるからである。大行が、親鸞の修する行であれば、親鸞の信心を詮索する余地があるかも知れないが、親鸞にとっての大行とは、親鸞の行ではないのである。それ故、『論註』讃嘆門の二不知三不信の議論が行巻には説かれないのである。いや、むしろ、親鸞が説いていないが故に、親鸞の大行理解にとって信心を詮索すべきではないと、我々は受け取らなければならない。

親鸞を獲信に導く称名を大行という。しかも、その称名の主語は問われない。石田慶和氏が記すように、「行巻」冒頭の「大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり」では、その主語が規定されていないのである。[52] すなわち、誰が称えるかと言うことが問題ではなく、衆生の闇を晴らす、言葉を換えるならば、未信の衆生に弥陀の大悲が届く、その接点・方向性を示す言葉と理解しなければならない。

五

「化身土巻」は、その巻名によれば「真仏土巻」と対応している。また、標願・標挙・細註に注目すれば、「教巻」「信巻」「証巻」と対応していることがわかる。しかし、「行巻」のみ「化身土巻」との対応を見ることができない。これは、「行巻」に明かされる念仏・称名に真仮があるわけではなく、南無阿弥陀仏が真実であることを表すものである。我々はしばしば、「自力の念仏」「他力の念仏」と表現する。この表現からは、念仏に自力念仏・他力念仏の二種が存在する印象を与える。しかし、念仏に二種の念仏があるのではない。念仏はそもそも真実なのである。『歎異抄』後序に「念仏のみぞまこと」と記される。信心を具しているから念仏がまことなのではない。念仏がまことなのである。自力念仏・他力念仏とは、その念仏の真実を信知し得ないか、信知し得るかの相違であって、「自力念仏」という念仏があるのではなく、また「他力念仏」という念仏があるのでもない。

「行巻」の理解としては、名号、或いは、真実信心を具した称名を大行とする理解が大方であり、その論拠の一

つに、称名破満釈と曇鸞『浄土論註』讃嘆門釈の名号破満との関係が指摘できる。本論はその指摘に一つの疑義を呈したものである。つまり、「行巻」称名破満釈と、「信巻」に引かれる『論註』の引文について、その両者の意味をほぼ同意と考え、「行巻」に「信巻」を重ねて註解されてきた理解の大方を示した。その上で、「行巻」称名破満釈と「信巻」大信釈の引文の内容を検討することによって、従来の「行巻」理解と立場を異にする思想の提示を試みた。大方の批評を乞う。

註

(1) 星野元豊『講解教行信証』（法蔵館、一九七七年、三三頁）、信楽峻麿『教行証文類講義　第一巻』（法蔵館、一九九九年、三頁以下）、梯實圓『教行信証　教行の巻』（本願寺出版社、二〇〇四年、四四頁以下）など。

(2) 『真宗聖教全書Ⅱ』（以下、『真聖全Ⅱ』）二〇三頁、『浄土真宗聖典（註釈版）』（以下、『註釈版』）四七三頁。「化身土巻」の三願転入を述べた後に「ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり」（『真聖全Ⅱ』一六六頁、『註釈版』四一三頁）とあるのも、知恩報徳を表す語である。

(3) 『真聖全Ⅱ』二〇一頁、『註釈版』四七一頁。

(4) 『真聖全Ⅱ』二〇三頁、『註釈版』四七三頁。

(5) 『真聖全Ⅱ』二頁、『註釈版』一三四頁。

(6) 『真聖全Ⅱ』五頁、『註釈版』一四〇頁。

(7) 『真聖全Ⅱ』四八頁、『註釈版』二一〇頁。

(8) 『真聖全Ⅱ』一〇三頁、『註釈版』三〇六頁。

(9) 『真聖全Ⅱ』一二〇頁、『註釈版』三三六頁。

(10) 『真聖全Ⅱ』一四三頁、『註釈版』三七四頁。

(11) 『真聖全Ⅱ』一一九頁、『註釈版』三三五頁。

(12) 岡亮二氏の指摘による。『『教行信証』「行巻」の研究―第十七願の行の解明―』永田文昌堂、一九九六年、一〇五

～一〇八頁。

(13) 「大無量寿経（真実の教　浄土真宗）真実の教を顕す　一、真実の行を顕す　二、真実の信を顕す　三、真実の証を顕す　四、真仏土を顕す　五、化身土を顕す　六」は『教行信証』の目次であるとの説もあるが、むしろ、『大経』に説かれる内容がこの六点であり、『大経』によって『教行信証』が記されることが端的に示されていると見るべきである。

(14) 法然の浄土三部経観については、坪井俊映『浄土三部経概説　新訂版』（法蔵館、一九九九年）十五～十九頁参照。また、弥陀経讃や、観経讃が記される「浄土和讃」は、三部経を真実と見るが、たとえば、『浄土三経往生文類』は、三部経に真仮を見ている。また、三部経を真実と見る中にも、『大経』は法の真実を、『観経』は機の真実を明かし、『弥陀経』は機法合証の経と見る見方もある。

(15) 『真聖全II』六〇六頁、『註釈版』六七九頁。『親鸞聖人真蹟集成』第四巻、三〇五・三一〇・三一一頁。

(16) 「要門とはすなはちこの『観経』の定散二門これなり。定はすなはち慮りを息めてもつて心を凝らす。散はすなはち悪を廃してもつて善を修す。この二行を回して往生を求願せよとなり。弘願といふは『大経』の説のごとし」といへり」『真聖全II』一四八頁、『註釈版』三八三頁。

(17) 「少善根福徳の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず。阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持せよ」『真聖全II』一五八頁、『註釈版』四〇一頁。

(18) 拙稿「親鸞の「はからい」考」『真宗学』第百五・百六合併号、二〇〇二年。

(19) 『真聖全II』五八頁、『註釈版』二二九頁。

(20) 『真聖全II』一〇六頁、『註釈版』三一二頁。

(21) 『真宗全書』第三十六巻、二二頁。

(22) 『真宗叢書』第八巻、五五～五六頁。

(23) 『真宗全書』第二十四巻、一一六頁。

(24) 『真宗叢書』第七巻、十五頁。

(25) 『真宗大系』第十三巻、一七三～一七七頁。

(26) 『真宗全書』第二十二巻、一一一～一一二頁。

(27)『真宗全書』第二十六巻、一四五～一四六頁。
(28)『真宗全書』第三十二巻、一一〇～一一一頁。
(29)『真宗全書』第三十巻、一六七～一七二頁。「衆生信後の称名、諸仏讃嘆と徳を同じて、おのずから常行大悲の益もありて、他の所聞となり、他をして破満せしむ。その辺より云へば、全じて諸仏称名と云う位なきにしもあらざれ」の文言は、称名の大行たる所以を示すものであるが、これに続く「今はまさしく衆生みずからの称名行に依りて、おのずから破満の利益を蒙り居る相なり」の文言は、衆生自身の称名が、自身の闇を破り願を満たすという理解にたっている。自身の往生成仏のために如何なる行も為し得ないと信知した親鸞の仏教において、他をして破満せしめる点にこそ浄土真宗の行を見るべきである。
　また、「正念」の語について、『愚禿鈔』『浄土文類聚鈔』『末灯鈔』の中で、「信行」「大行」「信心」の義と意が分かれると指摘しつつ、ここ（行巻）では「信心とする」と結論づけている。その方法論的な根本的誤りが、註(12)岡著二三三頁に指摘されている。
(30)『真宗叢書』第七巻、二四五～二四六頁。
(31)『真宗叢書』第八巻、四七〇頁。
(32)『真宗叢書』第八巻、二一六頁。
(33)『真宗全書』第二十四巻、四〇六頁。
(34)『真宗叢書』第七巻、四九頁。
(35)『真宗大系』第十四巻、一三六～一四二頁。曇鸞と親鸞の訓点の相違について指摘されるが、その指南箇所が正しいとはいえない。
(36)『真宗全書』第二十二巻、四〇二～四〇三頁。
(37)『真宗全書』第二十七巻、二三八頁。
(38)『真宗全書』第三十二巻、四〇三頁。
(39)『真宗全書』第三十一巻、四〇～四二頁。
(40)『真宗叢書』第七巻、三二八～三三〇頁。
(41)『真宗叢書』第八巻、五六六～五六八頁。

(42) 早島鏡正・大谷光真『浄土論註』（大蔵出版、一九八七年、二四五頁）などに指摘される如きである。
(43) 『真聖全Ⅰ』三一四頁。
(44) 『浄土真宗聖典七祖篇（註釈版）』一〇三頁。
(45) 『真聖全Ⅱ』五〇頁、『註釈版』二一四頁。
(46) この一段は、岡亮二『教行信証口述50講　信の巻　上』（教育新潮社、一九九七年）九二頁参照。また、註(18)拙稿参照。
(47) 拙稿「親鸞思想における名号と称名の意義」『真宗学』第九七・九八合併号、一九九八年。
(48) 『真聖全Ⅰ』五頁、『註釈版』三一頁。
(49) 『恵信尼消息』『註釈版』八一一頁
(50) 『真聖全Ⅱ』一頁、『註釈版』一三一頁。
(51) 『真聖全Ⅱ』七七七頁、『註釈版』八五三頁。
(52) 石田慶和氏は、「『教行信証』の哲学的考察―「行巻」をめぐって―」（『理想』第四八五号、理想社、一九七三年）において次のように記す。

この「大行」を衆生の称名とするか、法体の名号とするかが宗学の論議の中心であった。その能行・所行の説に対して、能所不二説が対立を綜合する説として出され、それが宗学の定説とされているようである。しかし「無碍光如来の名を称する」という言葉が、何故に直ちに衆生（私）の称名と理解されなければならぬのか。この言葉は、仏名を称えることそのことを言っているので、その行為をおこす主体を指定してはいない。言いかえれば、念仏という行そのものを「大行」と言っているとは考えられないのであろうか。

キーワード　行巻、称名破満釈、信心